



ブータン王国の古都プナカのゾン(寺)は二つの川が合流する中州に建っていた。一本は白波がたけだけしい流れで、もう一本は緩やかな広い川だ。まるで陰陽二つの蒼い流れが寺を守っているようにだと見とれていると、けたたましい爆竹の音が聞えてきた。絵巻祭典、ツェチュが始まるのだ。

パサツプと呼ばれる刀を腰に刺した戦士が、疾風のごとく馬にまたがり邪気を払う。中庭からは管楽器の音色が響き渡り、老若男女、山岳部族の女性はヤクを連れ、子どもたちは踊りを見ようと眼を見開いている。仏教の教えを説く仮面舞踊が始まった。

ブータンの祝日は、親戚が集まって、遊び、食べ、遊び、食べを延々と続ける。さすが、経済よりも人の幸せを第一に据える国だけあって、あくせくしない。

祭りの日はその対極だ。人の憤怒や執着の形相を表した仮面舞踏。激しく旋回する錦の衣。心底「たまげた」と口を開けて観劇する人々の心は、雪解け水のように澄んでいるに違いない。

「静と動、陰と陽の対極で世界は成っている」と、壁に描かれた曼荼羅まんだらの仏が諭すようにほほ笑んでいた。

春 夏
秋 冬

19

4月 仮面舞踏ツェチュ

ヒマラヤ 遅い春の絵巻祭典

